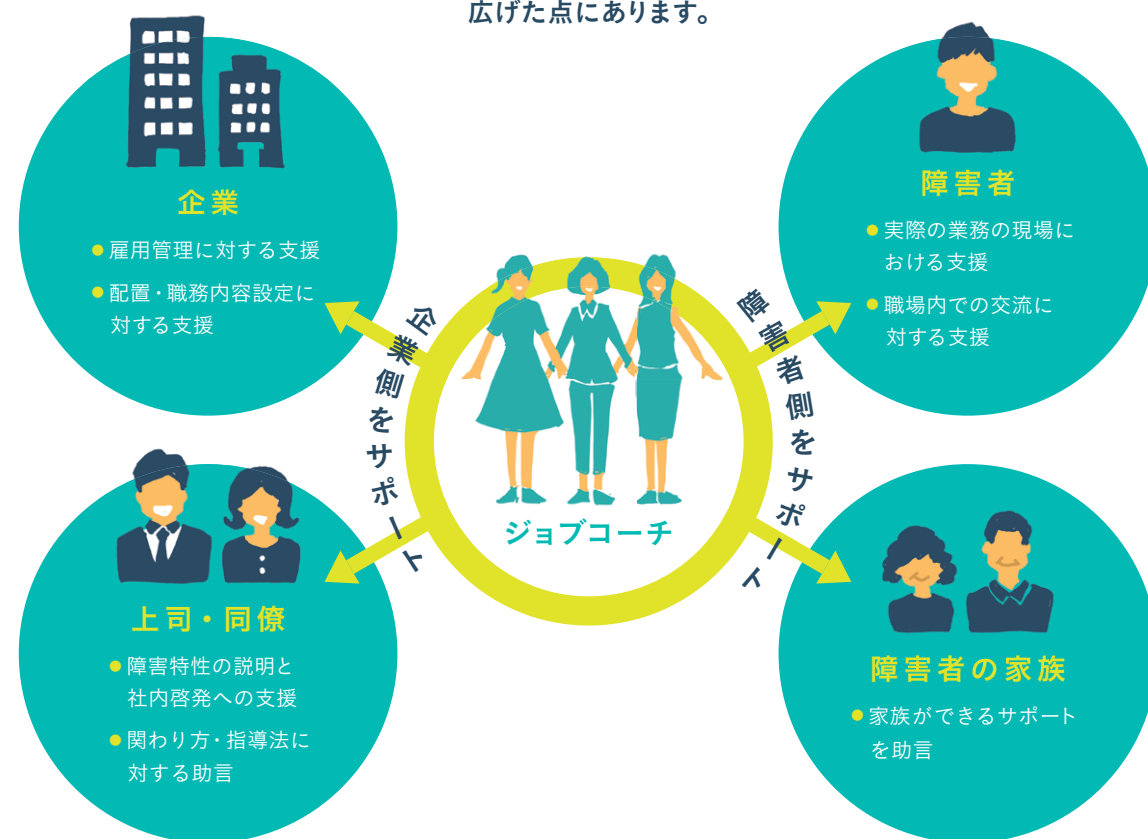


東京ロータリークラブ・チャレンジ110 (2022-2030) では
「誰もがいきいき働ける社会を作るプロジェクト」
～みんないきいきプロジェクト～において、
障害者と企業との橋渡しであるジョブコーチ制度への支援を開始します。

ジョブコーチ制度とは 障害者が職場に定着して長く働けるように支援する制度

最大の特徴は、これまで福祉の視点から障害者本人に偏りがちだった支援のフレームを、
受け入れる企業と、一緒に働く従業員に対しても
広げた点にあります。



本プロジェクトでは、
ジョブコーチの専門カリキュラムの習得を目指す学生に対する支援を行い、
多くの優れたジョブコーチ人材を輩出することで、ジョブコーチ支援の質を高めるとともに、
将来の資格化も視野に入れ、全国の高等教育機関での履修課程化を目指します。

障害者への偏見をなくそうと掲げても、すぐになくなるものではありません。
今回、東京ロータリークラブが行う挑戦はスタートです。
しかし、いつか、次の世代かその次の世代では、
誰もがいきいき働ける社会が当たり前になっているかもしれません。
今、その種を蒔きましょう。この挑戦は、SDGsの期限とされている2030に向けて、
我々が起こせる最良のアクションのひとつです。

東京ロータリークラブ・チャレンジ110 2022-2030



「誰もがいきいき働ける社会を作るプロジェクト」

～みんないきいきプロジェクト～

共生社会の実現に向けて、
ロータリークラブだからできることがある。
東京ロータリークラブが、
障害者就労支援を行う理由について。

障害の「害」がひらがなののが嫌い。

害やからよくないやろ、で、ひらがなにする。

私からしたら腕がないのが障害なんじゃなくて、それを持って生きていく社会が害。

私からしたら障害は本人じゃなく社会やから。

ひらがなに直して勝手に消さんといてほしい。

あるテレビ番組でのリオパラリンピック（2016）の水泳日本代表だった
一ノ瀬メイ選手の発言です。

障 害

障 が い

2000年ごろから、

「障害」が「障がい」と明記されることが多くなりましたが、
今はまた「障害」と漢字で書くほうが主流となっています。

一ノ瀬さんの言葉は、日本人が「障害」について深く考えるきっかけになったと同時に、
「障害」には、「医学（個人）モデル」と「社会モデル」という考え方があることを教えてくれました。

「医学（個人）モデル」と「社会モデル」

医学（個人）モデル

「障害」は個人の心身機能によるものとし、
個人的な問題とする捉え方。



社会モデル

「障害」は社会環境と個人の心身機能の間にあり、
社会全体の問題とする捉え方。



「社会モデル」は、2006年に国連で採択された「障害者権利条約」において考え方が示され、
日本では2011年に改正された「障害者基本法」において、この考え方が採用されています。

今、「障害」の概念は「医学モデル」から「社会モデル」へと変化しています。

国連で採択された「障害者権利条約」と日本憲法の新たに制定された「障害者基本法」に則って、
そして何よりも我々の指針とする“5つの奉仕”のうちの“職業奉仕”と“社会奉仕”と“青少年奉仕”を
強く実現するプログラムとして、東京ロータリークラブは、よりフェアな共生社会の実現のために、
下記の証明をビジネスのフィールドで行います。

「障害」を作り出しているのが社会ならば、
社会が「障害」をなくすこともできるはず。

2022年4月6日の卓話で村木厚子氏は、「福祉施設にいる障害者のうち9割は働ける」、
「障害者のほとんどが活躍をしたいと思っている」と教えてくれました。
しかし、日本人口の6%にあたる約800万人の障害者のうち、就業者は60万人しかいません。

その最大の理由は彼らに「障害」があるからではなくて、
社会が「障害」を作り出しているからなのです。

働きたいと
思っている障害者が、
障害者だからといって
差別されることなく、
就労のチャンスを得られる社会へ。

ビジネス・
雇用の面で、
フェアな世界を
目指したい。

ロータリーの目的の第3である
『ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること』
において、経済人の団体であるロータリークラブだからこそ、
ビジネスのフィールドにある「障害」を排除する方法を模索する。

これは、共生社会の実現に向けた東京ロータリークラブの挑戦なのです。